農力精神から得たもの

青山学院大学講師　本32回　熊田藤作

力農精神とは何か、ということを深く考えた上で、自分との接点を考えているわけではなく、過去、現在の個人的な体験の中で、これは、岩農時代に教えを受けた、あれだなと思い、またこれは、あの時の経験が生きているなと思ったりしてのことであり、客観性を欠き、他の校友諸兄にとっては迷惑な力農精神になりかねないことを恐れるが、その場合は、お許しをいただきたい。

力農精神は、土に生きる。つまり、農業生産を意図する生産人ないしはその指導者を育成するという基本精神の上に、先人の遺業を大事にし、更にその仕事を発展開発しようとする意欲的で堅実な人間を尊重するにあると思われる。

私は、今自分の在校時代の生活を顧みて、確かにそのような教育を受けたように思う。この基本精神は、時代の移り変りとは関係なく、時代と共に生活の形式に変化はあっても、変るものではないと思う。

私の在校時代の校長先生は荒川靖先生で、先生は朝礼の時に話されるお話の中で『ホワイ(何故か)の態度』ということを鼓膜に焼きつく程、度々話されたことを記憶する。人間においても、いい状態の場合と、そうでない状態の場合がある。それは、日常茶飯時いたるところにある。それはあたりまえのことであるが、しかしこのあたりまえの状態をあたりまえのものとして、また仕方ないものとして放置しておいてよいのだろうか。ということであったと思う。いい状態と、そうでない状態にはそれぞれの理由と原因がある。いい状態の人、またいい状態の作物については、漫心と油断することなく、何故現在の状態があるのだろうか、この望ましい状態を維持するにはどうしたらよいだろうか。さらにもう一段望ましい状態にするためには、どうしたらよいだろうと考えるべきであるというのである。また、望ましくない状態にある人、作物については原因を追求し、前者との比較の上にどうすべきかの方法を発見すべきで、そして、このことは総ての場合にあてはまるというのである。

ノーベル科学賞を受けた朝永博士は、理論の不備による研究の渋滞を、くり込み理論という仮説によってのり越え、仮説でなく理論としたのも、この『何故の態度』だったと思う。

第三者が成功者と思っている人でも、その人自身は満足しているものとは限らず、何らかの不満があるということを聞く。もっとも人間が満足している時は退歩を意味するものだと説く人もあるから、不満の感情を持つことは常人を意味するのかもしれないが、要はその不満が不満として感情の吐け口だけに終っているか(受動的不満)、不満を満足化させるための努力をしているかによってその不満の意味(能動的不満)が違ってくるし、結果についても大きく違ってくる。この違い、つまり不満を死んだものにしてしまうか。自分の生活に生かし生きたものとして、自分自身を豊かにするかは、すべて『ホワイ』の原理に基ずくものなのである。

次に『何故か』という『ホワイ』の方法論についてであるが、いたずらに原因の分析を追求するということを頭の中で理解するだけの観念論ではなく、それを生きた生物、作物の飼育、栽培の実習を通して指導する岩農教育の特殊性に意味がある。化学的生産は、ある前提条件下で行われる場合、一応その前提条件によった結果が出てくる。生物、作物の飼育、栽培の場合は、気候、土壌条件など人間の力では図り得ない条件が加わってくる。更に附随して病気などというむずかしい条件も加わってくる。この複雑な条件下において観察(読みとる)―分析―処法を考える―適切な処置をする。という場に応じた科学的態度の養成をする教育は農学校ならでの教育であると思う。このすばらしく、大切なものを感受性強く、人生の基礎を固める大事な時期である青春期に学べたということは、私にとって幸運であり、その後の生活のいろいろな面でプラスになっていることは疑わない。

今、人類が人類の究極の目標としているものは何だろう。それは宇宙の征服である。しかし、宇宙への征服と進出ということは、人工衛生を飛ばし、月旅行へのためだろうか。結果的にはそういうこともあり得るかもしれない。然し、それは研究途上における手段に過ぎたい。要は宇宙征服の結果は、科学、農業、水産、その他のものためのものであり、ひいては人類そのものを豊かにするものに他ならないのである。

ところで農学を学ぶ者にとって何が問題で何を征服することが課題であろうか。いうまでもなく、成育成長に必要な光、温度、雨、風、肥料、病気等々の要素と家畜や作物との関係である。簡単に考えても、前者三つの要素は宇宙科学者の取り組む気象的条件であり、それに対する衛生船の研究に当てはまる。そして後者の二つは宇宙飛行士の健康管理の研究に当てはまる。大変雑な考案だが、こう考えてくると、農業生産者の姿勢というものは近代的感覚を持った科学者の姿勢と同じものになる。こういう立場から在校生の諸君に、作物論における一層の研究と、より高度な経営の研究に希望と勇気を持って努力されますことを望んでおきたい。

さて現代が現代人に求めようとしている人間としての資質とは何だろうか? 自主性、考える態度、やりとげる態度等々であると思われるが、その中で三番目のやりとげる態度こそは最も大切なものであるということが出来る。

よく耳にする言葉であるが、この頃の若い者には意地がない、という事がある。これは、言い換えると忍耐と持続性がないということではないだろうか、忍耐と持続性、大変古い意識のように聞えるかもしれないが、現実に必要なものには古いも新しいもなく必要なのである。

近来の母校における教育内容については卒業後二十年たっている私にはとても推察出来ないが、当時の私達は、食糧事情や国状から正規の実習の外に、農家の援軍から開墾、用水堀作り、果ては飛行場作りまでさせられたものである。今追憶するに、必ずしも喜んでやったとも思わないが、得難い経験をしたと思っている。忍耐と持続性、それを支えるものは体力であり、確かな意志と強い精神力も、健全な身体からはぐくまれる。

私は、農学校出身者としては脱線したところに住む者となり、大学は文科をやり、更に芸術大学に学び、フランス留学では教育制度の研究という変った道を歩んでいる。人には、いろいろ苦労もあったろうとよく言われる。もし苦労があってそれを乗り越えた時点にいるとしたら、岩農時代の創造性に通じる『ホワイ』の教訓と実習を通して体得した、行ってのちに語る、という力農精神の恩恵の賜であると思う。

さし上る旭の如く爽やかに
もたまほしきは心なりけり

大空に聳えて見ゆる高嶺にも
登れば登る道はありけり

実習の時に力農神社の前で必ず唱った明治天皇の御製である。今となってこの御製の意味と力農精神の味わい深く、意味深いことが幾分かでも分って来たような気がする。

現代は比較幸福論の時代であるというが、然し幸福とは比較によって生まれるものだろうか。否、私はそれぞれの人がそれぞれの条件の中で自分らしく生き、自分を生かした生活をすることによって幸福感はわくものであると信ずる。いいかえれば自分が自分の価値を発見した時に生まれるとも言える。

雨にもうたれよう。
失敗は成功に結びつけよう。
結果だけがその人を物語る。
この力農精神こそ現代が現代人に求める精神と一致する。

私は自分自身、どれ程この精神と態度を身につけたかは別として、この精神をモットーとした学園の中で学んだことを誇りとしている。

(・)
(・)